

□ ピアノ

真嶋雄大

2015年は、国際ピアノコンクールが殊の外重なった年である。まず原則4年に一度開催されるチャイコフスキー・コンクールが6～7月に、3年毎のゲザ・アンダ国際ピアノ・コンクールが6月に、同じく3年毎のリーズ国際ピアノ・コンクールが8～9月に、また同時期にはブゾーニ国際ピアノコンクールも開かれた。さらに5年毎のショパン・コンクールが10月に、原則3年毎のロン＝ティボー国際コンクールがその直後の10月に、そして日本では浜松国際ピアノコンクールが11～12月に開催されたという、何十年に一度あるかの稀に見る激戦の年となった。

それぞれに気鋭の新人たちが名乗りを挙げたが、日本人コンテスタントに注目すると、ロン＝ティボーでは第3位に貫川風、第5位に深見まどかが入賞（第1位なし）、リーズでは第5位に北村朋幹が入賞したものの浜松国際では三浦謙司が1人だけ第3位に残りはしたが、本選には進めなかった。この他のコンクールでは、1月にサンクトペテルブルクで開かれたマリア・ユーディナ国際ピアノ・コンクールで恵藤幸子が第1位、5月のチャップマン・カンツォ国際ピアノ協奏曲コンクールで反田恭平が第1位、6月のリカド・ビニェス国際ピアノコンクールでも佐藤彦大が第2位入賞を果たしているが、数多くの日本人が国際コンクールで顕著な成績を収めていた一時とは少々隔世の感がある。

ちなみに浜コンでの第1位はアレクサンドル・カジェヴ（イタリア）、第2位はロマン・ロバティンスキー（ウクライナ）、第3位は3人でアレクセイ・メリニコフ（ロシア）、ダニエル・シュー（アメリカ）、アレクシア・ムサ（ギリシャ/ベネズエラ）、そして第4位がフロリアン・ミトレア（ルーマニア）という結果を得た。三浦謙司は奨励賞を授与され、また審査員のアルゲリッチが「アルゲリッチ賞」をカジェヴと沼沢淑音に、同じくネルセシアンが「ネルセシアン賞」を沼沢に贈った。なお2回審査委員長を務めた海老彰子は今回で退任、次回の審査委員長は2016年2月、ピアニストの小川典子と発表された。

さて作曲家のメモリアル・イヤーに目を向けると、2015年はシベリウスの生誕150年であり、スクリャービンの没後100年にあたった。両者ともにピアノ作品を遺しているため、年間を通して数多くのコンサートが開かれた。以前からシベリウスに深く傾倒している渡邊規久雄がリサイタルを、またシベリウス協会がピアノ四重奏曲やピアノ五重奏曲を、またスクリャービンでは、10月4日に10人のピアニストによるピアノ・ソナタ全曲演奏会が小金井で開かれた他、掛谷勇三、久保田千裕、伊藤憲孝、そして前回浜コン優勝のイリヤ・ラシニコフスキーらが、1日或いは2日をかけてソナタ全10曲を演奏するリサイタルが開かれ、多くの聴衆が会場に足を運んだ。

毎年開かれる音楽祭イベントも堅調。浜松国際ピアノアカデミーは音楽監督を中村絢子が務めており、それ以前に見つかった大腸癌による影響が懸念されたが無事に終了、しかしその後中村は大事をとって演奏活動を休止している。とは言え体調は回復していると伝えられており、音楽誌の連載も継続、2016年の同アカデミーが復帰の舞台となるようだ。

3月から4月にかけては、上野の各地で東京・春・音楽祭が開かれ、生誕100年の「リヒテルに捧ぐ」としてエリーザベト・レオンスカヤやアレクサンドル・メルニコフが、またスクリャービンを野平一郎が、他にもフランチェスコ・トリスターノや平井千絵、三浦友理枝、須藤千晴、佐藤卓史、津田裕也、三輪

郁らが出演してその華を競った。またラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポンも例年通りGWの風物詩となり、同時に東京・国際フォーラム等の他、新潟、金沢、びわ湖でも開催されて盛況を呈した。

5月にはカワイ表参道パウゼで、「ショパン・フェスティバル2015」が開幕、青柳いづみこ、高橋多佳子、阪田知樹、東誠三、関本昌平、松本和将、そして米津真浩らがショパン音楽の愉悅を一週間にわたって競演した。

秋には、こちらも定番となっている「仙台クラシックフェスティバル2015（せんくら）」が10月に開催され、入場者数は37400名にも達したという。10回目を迎えた今回は、出演者も館野泉や横山幸雄をはじめ、本公演だけで562名、東日本大震災の地に着実に根付いていると言えるだろう。また仙台出身の小山実稚恵は8月、大震災からの復興を支援する体験型イベント「子どもの夢ひろば『ポレロ』」を自ら企画、子どものみならず大人も一日中楽しめるコンサートとなった。その小山実稚恵は2015年にデビュー30周年を迎え、春には大野和士指揮東京都響とショパンの第2番とラフマニノフの第3番、秋には広上淳一指揮N響とショパンの第1番とラフマニノフの第2番という、まさに小山を標榜するプログラムでのコンサートを開催、比類ない造型や鮮烈なダイナミズムで圧倒的な名演を残した。ちなみに小山は同年から日本センチュリー響のアーティスト・イン・レジデンスを務めている。

また2016年にデビュー30周年を迎える仲道郁代は、東京文化発信プロジェクトの一環で、『実験&実演で分かるピアノのしくみ、ホールの秘密』というイベントを開催、「ホールの響きとは～再現～ピアニストがリハーサルで注文すること」、「ピアノのしくみにせまる～ピアノを解体してみよう」、「演奏への工夫～ピアニストは何を求めて舞台に立つのか」をテーマに多彩な切り口でワークショップを実践、集まった聴衆に強烈なインパクトを与えた。

また「三大作曲家の遺言」シリーズで、ベートーヴェン、ブラームス、シューベルトの最後の作品を2015年中に3回のリサイタルで演奏した田崎悦子、ポーランド共和国聖十字文化功労勲章を叙勲し、デビュー50周年記念リサイタルを開いた遠藤郁子、2015年も来日し、シューベルトやベートーヴェン「ディアバリ変奏曲」に重厚な解釈を示した内田光子などベテラン勢も健在、各々忘れられない演奏を残した。

加えてエリソ・ヴィルサラーゼ、レイフ・オヴェ・アンネス、イェフィム・ブロンフマン、マリア・ジョアン・ピリスをはじめとする外国ピアニストたちも相変わらず多数来日、リサイタルやオーケストラとの共演、また室内楽で音楽的感興を紡いだ。

次に楽器としてのピアノに目を向けたい。まずヤマハは今般、トランスアコースティックピアノを発表、アップライト・ピアノのタッチはそのままに、電子音源を使った音量調節や音質変換も自在なピアノを完成させ、パーゼンドルファーは280を基にしたモデル280VCを発表、立ち上がりが良く、同時にパワーもあるサロン向けのピアノだということである。今回の浜コンの本選出場者6人の内3人が選んだカワイは、EXの進化モデルEX-Lを送り出し、さらに多くの支持を得、スタインウェイは、フランスのクリスタル・メーカー「ラリック」とのコラボレーションとなる「ヘリコニア」を発表、その名の花をあしらったデザインで、黒と白の2種類がある。

その一方でアルド・チッコリーニ、イヴァン・モラヴェッツ、アラン・カーティス、中山靖子などの訃報が届いたのは痛恨の極みであるし、また主にピアノ・リサイタルや室内楽にその舞台を提供したきた東京・千駄ヶ谷の津田ホールが閉館したのはピアニストやファンにとっても大変残念であった。

2016年、ピアノ界がさらに活況を呈するよう大いに期待したい。